



Title	Modalwort oder Partikel ? : vielleichtの用法
Author(s)	佐藤, 修子; SATO, Shuko
Citation	独語独文学科研究年報, 13, 39-54
Issue Date	1987-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25742
Type	departmental bulletin paper
File Information	13_P39-54.pdf



Modalwort oder Partikel ? — vielleicht の用法 —

佐藤修子

0. はじめに

発話者の自分の陳述内容に対する主観的・心的態度を表わすといわれる Modalwörter及び Partikeln (特に Abtönungspartikeln) は、同じ範ちゅうに属する品詞として区別なく扱われたり⁽¹⁾、また区別される場合でも、その基準や分類が文法家の間で一致しているわけではない。さらに Modalwörter や Partikeln は、同一の語が両方の機能を有していたりあるいは Adverb としても機能するものが多いので、一層その区別を困難にしているように思われる。定義そのものが明確とはいえず、また一致した見解がないので呼び名も文法家によって異なっている。ここで扱う vielleicht を例にとれば、Weydt/Hentschel⁽²⁾ は Helbig/Buscha⁽³⁾ が Modalwort とする機能での vielleicht を Modales Adverb と呼ぶ。あるいはまた Weydt/Hentschel の Abtönungspartikel としての vielleicht の用法は、Helbig/Kötz⁽⁵⁾ の illokutive Partikel に相当する。Helbig/Buscha は単独で文頭に立てる Modalwörter と単独では立てない Partikeln とを統語論的にはっきり区別するが⁽⁶⁾、Hentschel は Partikeln の中に文頭に立てるものと立てないものがあるとして、Partikeln の中に Helbig/Buscha が Modalwort とする語、例えば jedenfalls なども含めている⁽⁷⁾。あるいはまた Hartmann は、Partikel として用いられる vielleicht の統語論的特徴と機能を調べる際に、決定疑問文に現われる vielleicht を Adverbial としているが⁽⁸⁾、これも決定疑問文の中の vielleicht を Partikel とする Helbig/Kötz⁽⁹⁾ の見解と異なる。Adverbien, Modalwörter, Partikeln の三品詞を明確に区別し、その根拠まで明らかにしているのは Helbig を代表とするグループである。Weydt に代表されるグループの分類及びその方法は前者とは異なり、分類及びその基準が私には明確ではない。しかしながら vielleicht に関しては、両者とも二つの異なる機能を区別して考えていることが明らかである。この論文では Helbig による三品詞の区別にのっとり統語論上の違いを手掛りにまず vielleicht の機能を Modalwort と Partikel に分け、さらに具体例によって意味を確認しそれぞれに現われる意味機能が Helbig/Kötz で定義されている Modalwort と illokutive Partikel それぞれの意味機能と一致するかを検討しつつ、perhaps の用法を記述してみたい。

1. Helbigによる Adverbien, Modalwörter, Partikeln の統語論的・意味論的違い

Helbig による Adverbien, Modalwörter, Partikeln の統語論的特徴をまとめると以下のようになる。⁽¹⁰⁾

Adverbien	Modalwörter	Partikeln
①文頭に立てる。	文頭に立てる。	単独で文頭に立てない。
②上位の母型文で言い換えられない（言い換えられる場合も wie に導かれる副文）。	上位の母型文で言い換えられる。（daß に導びかれる副文を支配する）	上位の母型文で言い換えられない。
③挿入文で言い換えられない。	挿入文で言い換えられる。	
④補足疑問文の答となる。	補足疑問文の答とならない。	補足疑問文の答とならない。
⑤決定疑問文の答とならない。	決定疑問文の答となる。	決定疑問文の答とならない。
⑥疑問文にあらわれる。	疑問文にあらわれない。 ⁽¹¹⁾	疑問文にあらわれる。
⑦命令文にあらわれる。	命令文にあらわれない。	命令文にあらわれる。
⑧願望文にあらわれる。	願望文にあらわれない。	願望文にあらわれる。
⑨ nicht が前に来る。	nicht が前にこれない。	
⑩代用形（代副詞）で置き換えられる。	代用形で置き換えられない。	
⑪従属文（副文、不定詞句）の中にあらわれる。	従属文（副文、不定詞句）の中にこれない。	
⑫比較級をつくれる。	比較級をつくれぬ。	
⑬並列できる。	並列できない。	
⑭外示的遂行文にあらわれる。	外示的遂行文にあらわれない。	

Helbig によれば、Modalwörter に属する一連の語は意味論的には主観的モダリティ（陳述内容への発話者自身の心的態度）を表わし、だから Modalwörter と呼ばれるのであり、統語論的に名づけるとすればこれらの語は Schaltwörter であるという。それは外見的には文の中にはめ込まれているこれらの語が、実際には文成分としての機能を持たず、本来の文内容の外に置かれているためである。⁽¹²⁾つまり Modalwörter は統語論的には文全体にかかっており、この文に発話者のコメントを加えるような形の上位にある文ないしは挿入文のような機能をはたしていると考えられている。これに対し Adverbien は一文成分であり、意味的には客観的な場所、時、状況等々を表わすものである。Partikeln は文成分でない点では Modalwörter と一致するが、潜在的な文の性格を持たない点が Modalwörter と異なる。文全体ではなく個々の語にかかるものであるとして Partikeln を Modalwörter と統語論的に区別した上で、Helbig/Kötz は意味機能的に異なる二種類の Partikeln を分けて考え

⁽¹³⁾る。一つはコミュニケーション機能の強い、言い換えると発話内の行為のインジケータの役割を担う Partikeln (いわゆる Abtönungspartikeln) であり、もう一つは発話内の行為のインジケータとしてではなく、主として形容詞や副詞にかかり、関連語を制限、明細化、等級づけあるいは強める働きをする Partikeln である。前者を illokutive Partikeln, 後者を semantische (または nicht-illokutiv) Partikeln と呼んでいる。illokutiv Partikeln は動詞にかかるため統語的に、また発話者の心的態度を表わす点では意味的に Modalwörter に近似し、特に同一語が両方の機能を兼ね具えている場合はその用法の判別が難しい。vielleicht も文型や文脈によって Modalwort であったり Partikel であったりする。またそれぞれの機能に於ても文脈や文型によって様々な意味合いを持つ。次に先の三品詞の統語論的違いを基に、可能な限り vielleicht を Modalwort と Partikel に分け意味の検討を進めてみたい。

2. Helbig の分類による vielleicht の Adverb の用法は存在しない

副詞として用いられる場合の vielleicht には、話者の不確かな推量を表わす Modalwort としての用法以外に、客観的な副詞としての用法はみあたらない。1. の表②③④⑤⑩⑫⑬⑭の統語的特徴からも Adverb ではないと言える。⑥⑦⑧は Partikel と共通する部分である。⑨については Partikel に関して直接言及されていないが前後どちらも可能と考えられ、あとで触れるように nicht が前に置かれている vielleicht の例は一応 Partikel として 4. 以下で扱う。⑪については vielleicht の従属文中に現われる例がいくつか見つかったが、いずれも話者の想像であることを示す主文に続くものばかりであり、これについては後述する。

3. Modalwort として用いられる vielleicht

Modalwort と Partikel を区別する目安となるのは 1. の表の ①②⑤⑥⑦⑧ である。1. の表①より Partikel は単独で文頭に立てないので、文頭に来ている vielleicht はすべて Modalwort と解釈できる。⁽¹⁴⁾ vielleicht が文頭に立つ例は非常に多く、例えば M. Ende の Momom に出てくる 88 例のうち 36 例が文頭に立ち、平叙文の文中に来る vielleicht は 19 例であった。Modalwort として用いられる vielleicht は、話者の不確かな推量、発話者が陳述内容に対して可能性 50% 以下で推量していることを表わす。⁽¹⁵⁾ vielleicht は書かれた物では Partikel としてよりも Modalwort としての用法が圧倒的に多い。また文頭に立つ例が多いのは Modalwort が文全体にかかることと関係すると考えられる。物語では話者の想像、推量、考えであることを明示する文脈の中に現われる例が多くみられた。また明示されていない場合も前後の文脈で話者の考えや推量であることが判断できる。

1) >> Vielleicht <<, dachte er, >> habe ich jetzt die hunderttausend Stunden eingespart und Momo freigekauft. << (Momo, S. 264)

2) >> Und vielleicht <<, versuchte Momo sich zu trösten, >> ist Kassiopiea schon längst wieder bei Meister Hora. . . . << (Momo, S. 229)

1の表⑩によればModalwörterは従属文の中に現われないことになっているが、⁽¹⁶⁾話者の想像や考えであることを示す主文に導かれる副文中には現われる。

3) Sie hofften, daß Gigi vielleicht zu erzählen anfangen würde, aber das ging nicht. (Momo, S. 75)

4) >> Nein <<, murmelte Beppo und starrte ratlos vor sich hin, >> das will ich nicht. Aber wenn sie doch vielleicht in Not ist? <<
>> Aber stell dir vor, wenn sie's nicht ist <<, fuhr Gigi fort, >> wenn sie vielleicht wirklich nur ein bißchen herumstrolcht und du hetzt ihr die Polizei auf den Hals. . . . << (Momo, S. 126-7)

5) Und weil sie befürchtete, daß die Leute sonst vielleicht wieder ärgerlich auf sie werden würden, wenn sie bloß so dazwischenstand, nahm sie sich im Vorübergehen noch einmal allerhand aus den Glaskästen. (Momo, S. 195)

6) Auch hier quälte sie wieder die Vorstellung, daß genau das vielleicht schon geschehen war, vor einer Woche oder gestern! (Momo, S. 213)

Modalwortは文型による分類では疑問文、命令文、願望文には現われないとされているので(1の表⑥⑦⑧)、これらの文型に現われる vielleicht をPartikelと解釈し4.以下で意味の検討を試みるが、平叙文で感嘆符や疑問符を伴う文や命令の意味合いにとれる文の中に vielleicht が現われることがある。すべて文頭に vielleicht が来ている例で統語論的にModalwortと解されるものである。

7) Vielleicht gab es hier alles umsonst! (Momo, S. 192)

8) >> Vielleicht ist es so was wie Atome? . . . << (Momo, S. 106)

9) Vielleicht ist sie so was wie ein Duft? Aber sie ist auch etwas, das immerzu vorbei geht. Also muß sie auch irgendwo herkommen. Vielleicht ist sie so was wie der Wind? Oder nein! Jetzt weiß ich's! . . . (Momo, S. 158)

10) Vielleicht gibt es den Buchladen gar nicht mehr? (UeG., S. 420)⁽¹⁷⁾

11) Vielleicht fragen Sie den Fahrer. (VV S., S. 12)⁽¹⁸⁾

8) 9) 10) にみられる疑問符を伴う文はしかしながら相手に答を求めるものではなく、話者が思いを巡らせたり考えたりしていることを表わす自問の文である。話者の不確かな推量を表わすModalwortの用法といえる。感嘆符を伴う文、例7も話者の想像や不確かな推量を表わしていると解釈できるが、

そこに含まれるニュアンスは疑問符を伴う文のものとは異なると思われる。それは疑問符を伴う文が「～ではないかしら、(ひょっとしたら)～かもしれない」等の表現で翻訳されるのに対し、感嘆符を伴う文が「きっと～なんだわ」等の翻訳表現になることから察せられる。⁽¹⁹⁾ 即ち単なる推量だけではなく話者の驚きが含まれていると考えられる。例 11) は平叙文の形であり疑問符も感嘆符も伴っていないが、文脈から判断して話者の陳述内容に対する主観的評価を表わすとは言い難い。つまり話者の不確かな推量を表わしているとはいえ、発話者が相手になんらかの発話意図を持って話かけていると考えられる。「運転手に尋ねてはどうか」と勧めている、あるいは「運転手に尋ねなさい」という命令形に不確かな推量を表わす言葉を添えて表現をやわらげている、と解釈できるのではなからうか。そうだとするならば、これは Modalwort であるというよりは発話内の行為のインジケータとして機能する illokutive Partikel の用法であると考えられる。⁽²⁰⁾

Modalwort は一般に文全体を支配すると言われているが、その現われる位置によって話者の推量その他がどこにかかると変わると考えられる。即ち Modalwort はその後に来るものを支配すると考えられる。⁽²¹⁾

- 12) Aber danach bleibt noch etwas zu tun, und das wird vielleicht von allem das Schwerste sein. (Momo, S. 244)
- 13) Wenn es so war, dann konnte sie es vielleicht tatsächlich noch bis zur Niemals-Gasse und zum Nirgend-Haus schaffen. (Momo, S. 231)
- 14) Und doch, so sagte sich Momo, waren sie sich vielleicht ganz nah. (Momo, S. 212)
- 15) ≧ … Ich meine, dann würden wir die Zeit-Spar-Kasse vielleicht auch eher finden, wenn noch andere mitmachen. (Momo, S. 101)
- 16) Ich meine, bis jetzt haben wir vielleicht noch gar keinen Grund, uns solche Sorgen zu machen. (Momo, S. 126)
- 17) Wenn er jetzt nach Hause ging, würde Vater in seinem weißen Kittel aus dem Labor kommen, vielleicht mit einem Gipsgeiß in der Hand, (DuG. S. 13)
- 18) … das wäre – den Mund halten, nichts mehr erzählen, verstummen, vielleicht für den Rest meines Lebens, oder doch wenigstens solange, bis man … (Momo, S. 207)
- 19) Wer weiß, wie oft es geschah, daß sie just an einer Stelle vorüberkam, wo Beppo erst vor einer Stunde, einer Minute, ja vielleicht erst vor einem Augenblick gewesen war. (Momo, S. 212)

4. Partikelとしての vielleicht

4.1. Semantische (nicht-illokutive) Partikelとして用いられる vielleicht

vielleichtには illokutive Partikel (Abtönungspartikel)の用法だけでなく semantische Partikelの用法もあると考えられる。etwaあるいはungefährで置き換えられる、数詞の前に来る vielleichtで、ungefähr(およそ)の意味で用いられる。

20) Der Urheber dieses Tumults war ein kleiner, dicker Junge von vielleicht zehn oder elf Jahren. (DuG. S. 5)

21) > … Wieviel Zeit benötigen Sie insgesamt für alle Mahlzeiten des Tages ? <
> Ich weiß nicht genau <, meinte Herr Fusi ängstlich, > vielleicht zwei Stunden ? < (Momo, S. 61-62)

22) > … Wieviel Zeit kostet Sie das täglich ? < > Vielleicht eine Stunde, aber … < (Momo, S. 62)

例 21)、例 22)は vielleicht を後に置くことも可能である。

21)' …、> zwei Stunden vielleicht ? <

22)' …、> eine Stunde vielleicht, aber … <

これは etwa の semantische Partikel の用法と非常に類似している。参考までに Helbig/Buscha の etwa の例を借りると、⁽²²⁾

Etwa eine Stunde hat er gearbeitet.

Eine Stunde etwa hat er gearbeitet.

この例は Partikel が単独で文頭に立てないこと (1の表の①)を示すと共に、多くの Partikel は名詞の前にも後にもこれることを示している。

ところで etwa には vielleicht と同様 illokutive Partikel (Abtönungspartikel)としての用法もあり、vielleicht との関連で次の 4.2.でふれたいが、Weydt/Hentschel は「いくつかの異なる意味を持つ etwa の底に流れる共通の意味とは、⁽²³⁾möglicherweise あるいは vielleicht の意味でないかと推測できる」として、「だから „etwa 80 Demonstranten“ は日常会話で „vielleicht 80 Demonstranten“ と言い換えられる」と述べている。⁽²⁴⁾この場合の etwa の用法を Weydt/Hentschel は Gradpartikel と呼ぶが、vielleicht も Gradpartikel とするのか、modales Adverb と考えるのかあるいは Abtönungspartikel に分類するのかは明らかではない。また Helbig/Kötz は、etwa には illokutive Partikel と nicht-illokutive Partikel の用法があるが、どちらの場合も etwa にアクセントがつかないので場合によっては二通りに解釈できるとし、次の例をあげている。⁽²⁵⁾

Kommt er etwa um 12 Uhr ?

(a)= ungefähr (nicht-illokutive Partikel)

(b)= vielleicht (illokutive Partikel)

(b)は否定の答を暗に含む、あるいは相手から否定の答を期待する etwa や vielleicht の用法である。ここでは nicht-illokutive Partikel の言い換えに ungefähr が、また illokutive Partikel の言い換えに vielleicht が用いられており、 vielleicht はあくまで illokutive Partikel と考えられている。しかし先にあげた 20)、21)、22) の例は文全体にかかるのではなく後に来る語を限定しており、vielleicht だけをとりだして文頭に置くことが出来ない。これは明らかに Helbig の言う Partikel であり、かつ意味的には nicht-illokutive Partikel である。(「およそ」ということが話者の不確かな推量からくることは確かであるとしても。) ところで例 20) では vielleicht が前置詞句の中に固定されているので一義的な解釈しか出来ないが、例 21)、22) は文脈によっては etwa の例(b)の解釈と同様、 illokutive Partikel の意味で用いられることもありうると思われる。

4.2. illokutive Partikel として用いられる vielleicht

文型によって用法が異なると考えられるので、文型別に意味の検討を進めたい。

4.2.1. 平叙文

平叙文で文頭に vielleicht が立つ例は Modalwort として 3. で扱った。その際ほとんどすべての例が問題なく Modalwort と解釈できたが、感嘆符を伴う文あるいは命令の意向で発せられている文だけ意味的に Partikel と解されるのではないかという問題が残った。平叙文の文中に現われる場合は Modalwort と Partikel の区別が形の上では困難である。Opalka は aber, ja, vielleicht が Abtönungspartikel として用いられる場合の統語論的条件を、ある一定の条件をみだす限られた型の平叙文について研究し、結論として 9 項目あげさらに意味的条件を 3 項目加えているが、⁽²⁶⁾これはあまりに煩雑で実際の応用には不向きである。また文中の特定の語に文アクセントがあることが条件であり (vielleicht そのものにアクセントはつかない) 話しことばには都合がよいが、書かれた物の場合は文脈から用法を判断しその結果文中のどの語にアクセントが来るかが分るので残念ながら役に立たない。vielleicht そのものとアクセントの関係は、vielleicht にアクセントがあるか、あるいはアクセントをつけることが可能な場合には Modalwort であると言われている。⁽²⁷⁾

さて明らかに Partikel として用いられている vielleicht の例は一つだけ見つかった。

23) » He, Momo! « brummte er, und es bereitete ihm sichtlich Verlegenheit, daß sie

ihn so sah, > gibt's dich auch noch! Was suchst du denn hier? <
 > Dich <, antwortete Momo schüchtern.
 > Na, du bist mir vielleicht eine! < sagte Nicola und schüttelte lächelnd den Kopf.
 > Kommt hier mitten in der Nacht her, um nach ihrem alten Freund Nicola zu sehen.
 Ja, ich hätte dich ja auch schon längst mal wieder besucht, aber ich hab' einfach
 keine Zeit mehr für solche ... Privatsachen. < (Momo, S. 81)

上の例は話者が相手に予期しなかったことをされて驚いている場面である。平叙文に現われる Partikel としての vielleicht は、Helbig/Kötz によれば異常と感じられる事態に対する驚きを表わし、それはそれまでその事態に関与していなかった聞き手にその文内容を納得させようという意図と結びついているという⁽²⁸⁾。また Weydt/Hentschel によれば、vielleicht はある事態の Daß (...であること) についてではなく、Wie (いかに...であるか) について驚きが発せられる時用いられるという。また聞き手の知らない、話し手のみが知っている事柄についての驚きを表わし、もし驚きの対象が話し手にも聞き手にも分っている場合は、驚きが(特別な量ではなく)特別な形態(質)に関連する時に vielleicht が用いられるという⁽²⁹⁾。vielleicht を伴う驚きを表わす文は倒置法(動詞が文頭に立つ)でもあるようだが例がみつからなかった。

さて以下にあげる例は一般には Partikel と解釈されないものであるが、Modalwort と解釈するには少し問題の残るものである。⁽³⁰⁾

24) > Warum ist denn alles so zu? < fragte Momo. > Da komm' ich nicht 'rein. <
 > WARTE! < erschien als Antwort.
 > Na ja <, meinte Momo seufzend, > da kann ich aber vielleicht lang warten. Woher soll Gigi wissen, daß ich hier draußen stehe - falls er überhaupt drin ist. <
 (Momo, S. 202)

これは先の例23)と同様 wohl で置き換えられる vielleicht である。wohl は話者の推量を表わす Modalwort として分類されていることもあるが、現在では Modalwort ではなく Partikel と考えられている⁽³¹⁾。möglichlicherweise や womöglich ではなく、wohl で置き換えられるところから Partikel として用いられているのではないかと想像される。例24)の vielleicht を伴う文は、内容的には話者が「きっと長いこと待たねばならぬだろう」と想像しているところだが、そのことを確信しているわけではないから bestimmt は使えない。そして単なる不確かな推量だけではなく話者のなんらかの感情が aber と共に vielleicht で表現されていると思われる。「でもきっと長く待つことになってよ」とでも訳せるだろうか。「きっと...よ」という3.の例7)に多少共通するなんらかの話者の感情が表現されるように思われてならない。

25) > Es wäre vielleicht gut <, sagte Momo, > wenn wir dabei ein bißchen mehr wä-

ren, nicht bloß wir drei. … ≪ (Momo, S. 101)

例25)は「三人きりではなくもっと多ければいいのにな」という願望を表わしている。ここでは *vielleicht* は話者の不確かな推量を表わすというよりは、「～であればよいであろう(のに)」という願望(「よいであろう」という表現に既に願望の意が含まれていると思われる)になんらかのニュアンスを添えている感じがする。期待していないことに対する願望ととれないだろうか。

26) ≧ Ich hoffe nur, ich habe dich nicht erschreckt, Momo. Es war nur ein kleiner Spaß von mir. Aber nun darf ich dich vielleicht erst einmal zu Tisch bitten, liebes Mädchen. Das Frühstück ist bereit. … ≪ (Momo, S. 147-8)

ここも話者の不確かな推量を表わしているとは言えない。「よろしかっただら食卓にお招きしたいのですが…」という丁寧の表現と考えられる。

27) ≧ wir meinen, du könntest vielleicht bei einem von uns unterkriechen. Wir haben zwar selber alle nur wenig Platz, und die meisten haben schon einen Haufen Kinder, die gefüttert sein wollen, aber wir meinen, auf eines mehr kommt es dann auch schon nicht mehr an. Was hältst du davon, eh? ≪ (Momo, S. 12)

例27)も26)と同様丁寧の表現と解釈できる。「おれたちのうちの誰かのところに世話になってはどうか」という勧誘に、「お前さえよければ」といった丁寧な気持が *vielleicht* で表現されていると考えられる。

28) Gigi überlegte ein wenig und fragte dann : ≧ Und wie soll es heißen? ≪

≧ Vielleicht - das Märchen vom Zauberspiegel? ≪ (Momo, S. 48-9)

29) ≧ Ich hab' euch so gesucht ≪, sagte Momo atemlos, ≧ Kommt ihr jetzt wieder zu mir? ≪ Die drei wechselten Blicke, dann schüttelten sie die Köpfe.

≧ Aber morgen vielleicht, ja? ≪ fragte Momo. ≧ Oder übermorgen? ≪ (ebd. S. 215)

30) ≧ Aber wenn du nichts von meinen Sachen magst, dann können wir vielleicht spielen, ja? ≪ (ebd. S. 88)

例28)～30)では話者が相手に「…などはどうか」と提案する際に *vielleicht* を用いている。これらの例も26)、27)と同様、丁寧の表現と解釈することができる。

以上平叙文で驚きを表現している以外の *vielleicht* の例をみてきたが、これを Modalwort ととるのか Partikel と解釈するのかという問題が残る。これらの例では *vielleicht* は、意味機能的にみて話者の陳述内容への評価を表わしているというよりは話者の感情、願望、また相手に行為を促したり何かを提案したりする時の丁寧の表現に用いられている。それ故 Partikel の用法に近い。

4.2.2. 疑問文

vielleicht は決定疑問文には現われるが補足疑問文には現われない。vielleicht を伴う決定疑問文の多くは、話者が相手に肯定か否定の判断を求めるものではなく、話者が相手から陳述内容を否定する答（肯定疑問では nein, 否定疑問では doch）を期待していると解釈される文脈に現われる。発話された文の中に文を否定する内容の発話者の答えが暗に含まれていると考えられる。

- 31) Soll er vielleicht ganz allein da draußen in einem Winkel hocken? (Momo, S. 85)
- 32) Ist das vielleicht ein Verbrechen? (ebd.)
- 33) Sind das vielleicht meine Schuhe? (Andorra, S. 118)
- 34) Oder bist du vielleicht kein Jud? (ebd. S. 20)
- 35) Hab ich ihn vielleicht an den Pfahl gebracht? (ebd. S. 24)
- 36) Soll ich vielleicht sagen, es gibt in Andorra kein anständiges Zimmer?(ebd.S.66)
- 37) …, > hast du zu Hause vielleicht keine Angst davor? << (Momo, S. 23)
- 38) >> Und haben die Leute vielleicht nichts bekommen für ihr Geld? Ich sage euch, sie haben genau das bekommen, was sie wollten! (ebd. S. 39)
- 39) >> … Wißt ihr es vielleicht? << >>Nein<<, gaben die andern zu.
>>Na also! << rief Gigi Fremdenführer. (ebd.)

例31)～39)の発言はすべて否定的内容の答を前提としている。日本語で表現すれば「～とでも言うのか」となるところである。このような例は比較的多くみつきり、特にMomoでは語り手が「そうでない」ということを読者に印象づけるためにこの表現を用いていると思われる例がいくつかみられた。以下にその例をあげる。

- 40) Konnte Momo dann vielleicht irgend etwas, das die Leute in gute Laune versetzte?
(Momo, S. 15)
- 41) Konnte sie vielleicht zaubern? (ebd.)
- 42) War Momo vielleicht so unglaublich klug, daß sie jedem Menschen einen guten Rat geben konnte? (ebd. S. 14-5)

決定疑問文でのこのような vielleicht とよく似た働きをする Partikel に、やはり決定疑問文中の etwa がある。Helbig/Kötz によれば etwa は決定疑問文にしか現われず、その際 etwa は聞き手に nein で答えるべきことを示唆しているという。⁽³²⁾ Weydt/Hentschel では決定疑問文の他に、否定と doch を伴う平叙文（疑いないし問いを伴う断言文で?!がつけられる）にも etwa が用いられ、いずれも問われている事態が好ましくないものであることが etwa によって示されている、という説明である。⁽³³⁾ vielleicht とほとんど同じ用法と思われるが、etwaの方が話者の否定したい気持がより強く表

現されるのではないかという印象を受ける。

ところで文脈から判断して話者が否定の答を予期しているとは思われない例が見つかった。

- 43) >> … Ist Ihnen dies Gesetz bekannt gewesen, Angeklagter? << >> Sehr wohl, Hohes Gericht <<, keuchte der. >> Dennoch haben wir untrügliche Beweis dafür <<, versetzte der Richter, >> daß einer von uns, ich wiederhole, *einer von uns* mit einem Kind gesprochen und ihm obendrein noch die Wahrheit über uns verraten haben muß. Angeklagter, wissen Sie vielleicht, wer dieser *einer von uns* war? << >> Ich war es <<, antwortete der Agent BLW/553/c zerschmettert. (Momo, S. 116-7)

ここでは話者はすでに答が ja であることを知っていて、相手からその答えを引き出すために質問を発していると思われる。「ひょっとして御存知か」という話者の推量を表わす Modalwort とも解釈できる。しかし Modalwort は疑問文に現われないことになっているので(1の表⑥)、このような vielleicht をどう扱うかという問題が残る。次の例も疑問文中の Modalwort と解釈できる vielleicht である。

- 44) Merkwürdig, dachte Bastian, warum redete der Alte plötzlich in einer fremden Sprache? Oder war es vielleicht eine Zauberformel? (DuG. S. 187)
- 45) Wie lange mochte es her sein, daß er von hier aus seine große Reise durch die Unendliche Geschichte angetreten hatte? Wochen? Monate? Vielleicht Jahre? (ebd. S. 419)

44)、45) の例は相手に答を要求する疑問文ではなく、いわば話者のひとりごと、話者の自問であり話者があれこれ考え巡らせていることを表わす文である。先に 3. で副文にはこれない Modalwort が、vielleicht については話者の想像や考えであることを示す主文に導びかれる時、副文中にすることができると確認したが、疑問文の中で vielleicht が Modalwort として機能する時も、同じことが言える。つまり疑問は自分に対する問いであり、vielleicht によって話者が想像したり考えたりしているのだということが表現されている。同様のことが ob に導びかれる副文についても言える。

- 46) Bastian überlegte. Er konnte unmöglich warten, ob vielleicht doch irgendwann einmal jemand kommen würde. (DuG. S. 420)
- 47) -ob sie vielleicht nach Andorra kommt, weil's drüben keine Männer gibt. (Andorra, S. 72)

次にこれまでとは用法を少し異にすると思われる例を1つあげてこの章を終りたい。

- 48) >> Können Sie uns das vielleicht näher erklären? << (Momo, S. 30)

例48)は「もっと詳しく説明してくれませんか」という依頼文の中に用いられた vielleicht で、丁寧の表現と思われる。4. 2. 1. の例26)、27) の用法と同じと考えられ、また dürfen や können 等の話

法の助動詞がきていることも共通している。

4. 2. 3. nicht を伴う vielleicht

vielleicht が Modalwort として用いられる場合は、Modalwort そのものの否定が不可能なので nicht は vielleicht の後に来る。(1の表⑨)

49) Entschuldige, Momo, du kannst das vielleicht nicht verstehen, aber... (Momo, S. 206)

そこで nicht が vielleicht の前に来ている例を一先ず Partikel と解釈し以下で検討してみたい。vielleicht の前に nicht が置かれている例がみつかったのは決定疑問文と ob に導びかれる副文中だけである。

50) >> Könntest du deinen blöden Kasten nicht vielleicht leiser drehen? << (Momo, S. 75)

51) >> Könntet ihr mich nicht vielleicht mitnehmen? ... << (ebd. S. 216)

52) >> Gut <<, sagte Momo, >> ich geh' mit dir. Aber könnte ich dich nicht vielleicht tragen, damit es schneller geht? << (ebd. S. 231)

例50)は「そのラジオ、もう少し音をさげられないか」という要求文であり、51)は「一緒につれてってくれないか」という依頼文、例52)は「おまえを抱いてはいけないか」と相手の意向を尋ねる文である。話法の助動詞 können がきているのも含めて4. 2. 2.の例48)の vielleicht の用法と同じ丁寧の表現と考えられる。

53) >> Gibt es da nicht vielleicht noch einen anderen, einen erwachsenen Mann, einen erfahrenen Jäger dieses Namens? << (DuG. S. 41)

54) Einen Augenblick lang war sie sogar unsicher, ob der graue Herr nicht vielleicht recht hatte. (Momo, S. 95)

55) Lange Zeit geschah gar nichts, und Momo begann zu überlegen, ob Kassiopeia sich nicht vielleicht doch einmal geirrt hatte. (ebd. S. 202)

例53)~55)の vielleicht は意味的に Modalwort と解釈できる。話者の不確かな推量を表わしており、特に例54)、55)では話者の考えや想像であることが主文の動詞句にはっきりと現われている。疑問文や副文に現われる Modalwort としての vielleicht と同様、このような条件のもとでは nicht が vielleicht の前に来れるということなのだろう。

5. まとめ

vielleicht の用法

1. Modalwortとして話者の不確かな推量を表わす。決定疑問文でvielleichtが用いられている時は話者の自問である。副文中に用いられたり、nichtが前に来ることもあるが、その場合は話者の不確かな想像や考えであることが文脈上明らかである。
2. nicht-illokutive Partikelとしてungefähr(およそ)の意味で用いられる。単独では文頭に立つことができない。
3. illokutive Partikelとして平叙文では予期していなかったことに対する驚きを表わす。また話法の助動詞können, dürfenなどと共に用いられて丁寧を表わす。決定疑問文では否定の答を予期していることを表わすのにvielleichtが用いられる。疑問文の形をとっているが話者ははじめから否定の答を用意して発言している。またkönnenやdürfenなどの話法の助動詞と共に用いられる時は丁寧を表わす。なお平叙文に疑問符のついた形では提案や勧誘の表現になる。丁寧の意味に用いられる時など、Partikelでも文頭に立つことがあると考えられる。

【 注 】

- (1) 例えばDuden, S. 303 参照
- (2) H. Weydt/E. Hentschel (1983), S. 16
- (3) G. Helbig/J. Buscha (1974), S. 449-452, またJ. Erben (1972), S. 178, もModalwortと呼ぶ。
- (4) AbtönungspartikelについてはH. Weydt/E. Hentschel (1983), S. 3-5 参照、またvielleichtについては同S. 36 参照
- (5) G. Helbig/W. Kötz (1985), illokutive PartikelnについてはS. 14-17, S. 23-37, またvielleichtについては同S. 36 参照
- (6) G. Helbig/J. Buscha (1974), S. 428-429, また詳しくはG. Helbig/W. Kötz (1985), S. 9-10 参照
- (7) E. Hentschel (1983), S. 46
- (8) D. Hartmann (1979), S. 123
- (9) G. Helbig/W. Kötz (1985), S. 26-29
- (10) ModalwörterとAdverbienの違いについてはG. Helbig (1984), S. 108-109, S. 114 に詳しい。またG. Helbig/J. Buscha (1974), S. 428-429, S. 446-448, G. Helbig/W. Kötz (1985), S. 9-10, Grundzüge einer deutschen Grammatik (1981), S. 209 参照
- (11) G. Helbig (1984), S. 108, S. 113 参照。Grundzüge einer deutschen Grammatik (1981), S. 209, では疑問文への現われ方に制限があるとして可能なものの例がのっているが、これらの例はHelbigの見解ではPartikelあるいはAdverbの用法として考えられているものである。
- (12) G. Helbig (1984), S. 105

- (13) G. Helbig/W. Kötz (1985), S. 16-17
- (14) 同上 S. 40 には、Das ist vielleicht eine Überraschung! (Partikel) と Das ist vielleicht eine Überraschung. = Vielleicht ist es eine Überraschung. (Modalwort) が使い分けの例としてあげられている。
- (15) これについては佐藤 (1984), S. 1-31, U. Hoberg (1973), S. 87-102 参照
- (16) G. Helbig (1984), S. 109, は In einem abhängigen Satz (Nebensatz oder Infinitivkonstruktion) können Modalwörter nicht stehen, während modale Adverbien auftreten können: として不定詞句の例をあげている。Wir werfen ihm vor, unpünktlich (langsam) zu kommen. *Wir werfen ihm vor, vermutlich (leider) zu kommen.
- (17) DuG. = Die unendliche Geschichte.
- (18) VVS. = Vor den Vätern sterben die Söhne. この例は佐藤 (1984) で命令文に現われる例としたものだが、文型からいくと平叙文である。
- (19) 翻訳した場合の表現の違いが用法を見分ける上での手掛りとなると考えられる。例えば Asbach-Schnitker (1977), S. 38-61, は Partikel „wohl“ の用法を調べる際に、個々の例が英語でどう翻訳可能かを手掛りに wohl の異なる機能を検討している。
- (20) R. Klappenbach/W. Steinitz (Hrsg.): Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache には、日常語で本来の意味を失い Partikel 的に問いや依頼で丁寧の言い回しに用いられる vielleicht の例があげられている。ほとんどは疑問文の形で、können や werden の接続法又 dürfen を伴う場合が多い。平叙文の形でも疑問符が添えられている。さらに断固たる要求を強調するための用法として感嘆符を伴った平叙文の例があげられているが、これらの例はすべて vielleicht が文頭にきている。
- (21) U. Hoberg (1973), S. 90 参照
- (22) G. Helbig/J. Buscha (1974), S. 431
- (23) H. Weydt/E. Hentschel (1983), S. 3-4, は一つの Partikel が持つ異なる用法すべてに共通する意味というのは抽象的で、個々のケースを説明するにはあまりに一般的すぎ、また個々の用法を記述するだけではこれらの用法にどういう関連があるかを分りづらくするとして、個々の用法と全体に共通する意味との両方の記述を試みている。
- (24) 同上, S. 12
- (25) G. Helbig/W. Kötz (1985), S. 41
- (26) H. Opalka (1977), S. 131-154
- (27) G. Helbig/W. Kötz (1985), S. 40 参照
- (28) 同上, S. 36

- (29) H. Weydt/E. Hentschel (1983), S. 16-17, これに対し驚きが量の特別さに関する時は aber が用いられる。(同、S. 6)
- (30) Helbig/Kötzによれば、Partikelとしてのvielleichtは叙述文には現われないので、平叙文でPartikelとして用いられた場合その文は自動的に感嘆の意向を持つ文となる、つまり書きこ
とばでは感嘆符を伴うことになる。また実際に叙述文としての平叙文でvielleichtが用いられた場合はModalwortの用法となる、という。(G. Helbig/W. Kötz, 1985, S. 37)
- (31) G. Helbig (1984), S. 105, では wohl を Modalitätspartikel としている。
- (32) G. Helbig/W. Kötz (1985), S. 35
- (33) H. Weydt/E. Hentschel (1983), S. 11

【 参 考 文 献 】

- Asbach-Schnitker, B. : Die Satzpartikel „wohl“. In : H. Weydt (Hrsg.) : Aspekte der Modalpartikeln. Tübingen 1977.
- Der große Duden. Grammatik. Mannheim 1966.
- Erben, J. : Deutsche Grammatik. Ein Abriß. München ¹¹1972.
- Grundzüge einer deutschen Grammatik. Akademie-Verlag, Berlin 1981.
- Hartmann, D. : Syntaktische Eigenschaften und syntaktische Funktionen der Partikeln eben, eigentlich, einfach, nämlich, ruhig, vielleicht und wohl. In : H. Weydt (Hrsg.) : Die Partikeln der deutschen Sprache. Berlin-West/New York 1979.
- Helbig, G. : Die deutschen Modalwörter im Lichte der modernen Forschung. In : Studien zur deutschen Syntax. Bd. 2. Leipzig 1984.
- Helbig, G./J. Buscha : Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. Leipzig ²1974.
- Helbig, G./W. Kötz : Die Partikeln. Zur Theorie und Praxis des Deutschunterrichts für Ausländer. Leipzig 1985.
- Hentschel, E. : Partikeln und Wortstellung. In : H. Weydt (Hrsg.) : Partikeln und Interaktion. Tübingen 1983.
- Hoberg, U. : VIELLEICHT-WAHRSCHEINLICH-SICHER. In : Sprache der Gegenwart 24. Linguistische Studien 4. Düsseldorf 1973.
- Klappenbach, R./W. Steinitz (Hrsg.) : Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache. Berlin 1978.

Opalka, H.: Zum syntaktischen Verhalten der Abtönungspartikeln „aber“, „ja“ und „vielleicht“ in Satzkonstruktionen mit prädikativen Ergänzungen. In: H. Weydt (Hrsg.): Aspekte der Modalpartikeln, Tübingen 1977.

佐藤修子: 話者の推量あるいは疑念を表わす副詞— vielleicht, wohl, vermutlich, wahrscheinlich, offenbar — について、北海道大学独語独文科研究年報、第10号、1983.

Weydt, H./E. Hentschel: Kleines Abtönungswörterbuch. In: H. Weydt (Hrsg.): Partikeln und Interaktion. Tübingen 1983.

〔 例 文 出 典 〕

Brasch, T.: Vor den Vätern sterben die Söhne. Rotbuch Verlag. Berlin 1977.

Ende, M.: Die unendliche Geschichte. K. Thienemanns Verlag. Stuttgart 1979.

Ende, M.: Momo. K. Thienemanns Verlag. Stuttgart 1973.

Frisch, M.: Andorra. Bibliothek Suhrkamp. Frankfurt a. M. 1970.

(北星学園大学講師)